うた×バト②

見つけた、最高の憧れでライバル！

緋村燐・作

ももこっこ・絵

アルファポリスきずな文庫

もくじ♪

学期末トーナメント、二回戦勝利！……6
憧れの輝く人たち……20
決勝会場はすごい場所……26
防御の創作歌、作成中！……37
過去の財産……45
藤原先輩のシング・バトル……59
花環社長という人【雄翔side】……75
横山くんと『月姫』……84
導きの星……97
キミの憧れに応えたい【雄翔side】……107
デモバトルにドキドキ！……109
焦りと失敗……123
私だけの輝き……154
みんなの夢を背負って……163
きらめき目指して、メタモルフォーゼ！……170
月の女神の化身【雄翔side】……198
夢に向かって、つき進め！……202

藤原翼

アイドルグループ S-JIN のメンバー。
大人っぽくて色っぽい。

横山陽向

アイドルグループ S-JIN のメンバー。
好意をぶつけるときはまっすぐ!

長澤絢

天才子役タレント。
メタモルフォーゼができる。

吉岡藤子

流歌の同じクラスの同級生。
流歌の頼れるチームメンバー!

本田千代・千絵

双子の姉妹。
千代が作詞家希望、
千絵が作曲家志望。

金井流歌

歌うことが大好きな中学一年生。
学内の『シング・バトル』に挑戦中!

ラブちゃん

流歌の相棒の
『うたアニ』。
歌を聞くのが
大好き!

橘雄翔

アイドルグループ
S-JIN のメンバー。
流歌の最推しアイドル。
流歌のことがひっそり好き。

シング・バトルとは!?

歌声から感情を読み取り、成長する**AIアニマル**『**うたアニ**』同士を戦わせるバトルのこと。
今、超・人気の**eスポーツ**だよ！　キーワードの入った歌に思いを込め、上手くいけば『**メタモルフォーゼ**』ができる。

○学期末トーナメント、二回戦勝利！

赤いモミジが絨毯みたいに敷き詰められた、紅葉がキレイな山の中。
赤、オレンジ、黄色に彩られたVRフィールドの中で、私は歌を紡いだ。

困難は振り払え　誹謗中傷は受け流せ
悪意から守る　そのバリア
気づいて　あなたはちゃんと持っている

隣にいる茶色いうさぎのうたアニ、ラブちゃんが歌に反応してほのかに光る。
それを確認すると、対戦相手であるB組の似取くんのうたアニが動き出した。
うたアニっていうのは歌声から感情を読み取って成長するAIアニマルのこと。

今は、そのうたアニを使って戦うシング・バトルの真っ最中なんだ。このターンが終わったら、私の最後の攻撃の番になる。
「攻撃が来るよ！　ラブちゃん、お願い！」
私の声に反応したラブちゃんは、垂れた長い耳をぐるぐると振り回しはじめる。扇風機のように風が起こって、キラキラとエフェクトの光が舞った。
光は風と混ざり合って、銀河系を思わせる光の渦になる。きらめきを帯びた渦は、そのまま盾となって似取くんのうたアニであるカンガルーの攻撃を受けた。
「ラブちゃん、頑張って！」
私の歌に乗せられた感情で防御力が決まるから、今応援してもどうしようもないのはわかってる。それでも攻撃に耐えてほしいって思うと声が出ちゃう。
相手の似取くんが歌ったのは、プレイヤーチームが一から作った創作歌と言われるものだ。
私が歌ったのは基本をアレンジしただけのアレンジ歌。
チームメンバーで作る創作歌の方がより強い感情を乗せられるから、どうしたってアレンジ歌じゃあ押し負ける。
案の定、ラブちゃんがつくった光の渦の盾はひび割れて砕け散った。

「きゃあ！」
盾で防ぎ切れなかった攻撃が私の分身、アバターに届く。
痛みはないけれど、映像としてグローブをつけたカンガルーの右手が迫るのを見ているから悲鳴が出ちゃう。彗星のような軌跡を描いたカンガルーの攻撃が過ぎ去ってから、私はフィールドの空中に表示されているHPゲージを見た。
私のHPがどんどん減っていき、46で止まる。
ここまでで似取くんのHPを68まで減らせているから、点差は22。
最後、三バトル目で勝者が決まる！
『点差は22か。これだけ差があるなら、逆転は難しいんじゃないか？』
早くも勝ち誇ったような似取くんの声がヘッドホン越しに聞こえてくる。
たしかに相手も防御する以上、大きな点差が開いていたら巻き返すのは難しい。
でも、勝てないほどの差じゃない！
「逆転、させてもらうよ！」
宣言をして、私は勝ちたいという意志を強める。
次の攻撃は創作歌。私のために、チームのみんなが曲を作って、歌詞を作って、エフェクトを作ってくれた歌。
大事な仲間が作ってくれた歌だもん。上手く歌いたいし、勝って次の準決勝に進みたい！
大きく息を吸って、私は勝ちたいっていう感情を込めて歌った。

上弦の月　夜空に浮かぶ
引き裂くために　現れたのか
負けないよ　つないでみせる　この絆

攻撃のためのキーワード【引き裂く】を歌詞に入れた創作歌。
しっかり読み取った証に、ラブちゃんの全身がぽわっと光った。
その様子を見た似取くんは、ふんっ、と鼻で笑ってすぐに防御の創作歌を歌う。

ビートを　上げろ
魂を　打ち鳴らせ
防ぐのは　俺の敵だけでいい

ロックな雰囲気の歌に含まれる防御のキーワードは【防ぐ】。歌を読み取って、似取くんのアバターの横にいるカンガルーが、ラブちゃんと同じようにほんのり光った。

「ラブちゃん、お願い！」

私が声を上げると、まさに幕を下ろしたって感じにフィールドが一気に暗くなる。そんな中でも、紅葉はまるでライトアップされたみたいに赤く鮮やかだった。キレイな絨毯みたいなモミジ。そんな地上の赤を見下ろすように、真っ暗な空には半分の月が浮かぶ。

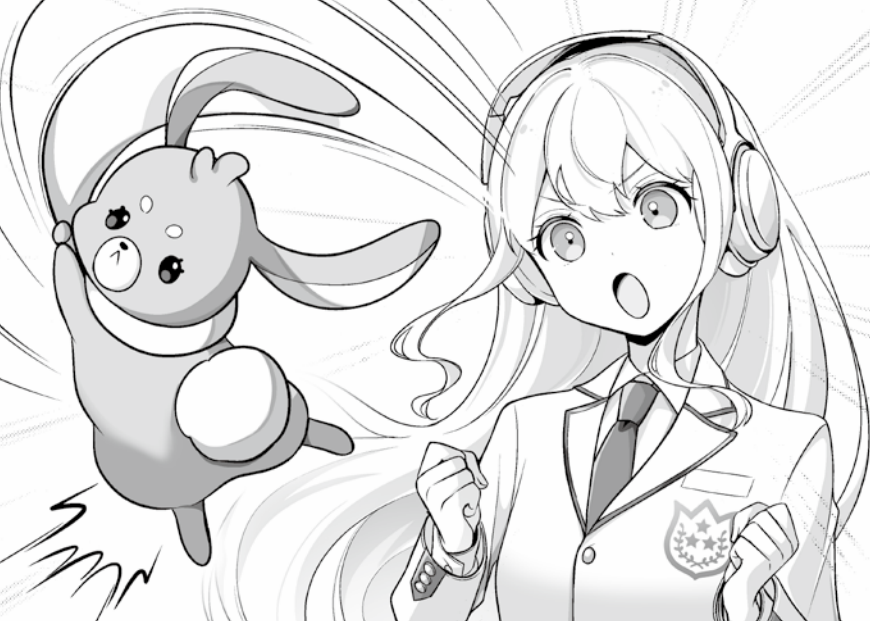
その半月に向かってラブちゃんは高く跳び上がり、月の端っこをかわいいモフモフの手でつかんだ。

すると今度は似取くんの大きな声が聞こえる。

『カガリ！　守り切れ！』

自信満々で力強い似取くんの呼びかけに、彼のうたアニ、カンガルーのカガリは地面に強力なパンチを打ちつけた。

すると周りの土が盛り上がり、壁のようになる。そこに向かってさらにパンチを連打すると、火花を散らしながら土が赤くなって、形が整えられていく。



まるで前にテレビで見た刀鍛冶の光景みたい。なんて思っていると、土の山だったものは硬い鉄壁のようになっていた。

最後に歌うくらいだもん。かなり強い防御になってると思う。

でも、私だって思いのたけを歌に込めた。

「ラブちゃん、勝とう！」

歌に込めた思いを再確認するように呼びかけると、ラブちゃんが夜空に浮かんだまま小さな体を思い切りひねる。

そして、つかんでいた半月をブーメランのように鉄壁めがけて投げつけた。

ガキィィィン！

甲高い音を立ててラブちゃんのブーメランが戻ってくる。攻撃は一度で終わりじゃない！

攻撃力は落ちるけど、このブーメランは何度でも相手に向かっていくんだ。
うたアニがフィールドと同属性だと補助ポイントが入るから、このフィールドと同じ【金】属性のカガリはラブちゃんより有利だ。
でも私の強い思いのおかげか、ラブちゃんはカガリの鉄壁を二度目の攻撃で壊す。
『なっ！　こんなに早く壊れるなんて！』
似取くんの驚きの声と共に、ラブちゃんの攻撃が彼のアバターに届いた。
『くそっ！』
悪態が聞こえると同時に、私は似取くんのHPゲージを見る。
68だったHPはどんどん下がって、41で止まった。
『【金井流歌WーN！】』
私の勝利を告げる音声と共に、フィールドの空中に文字が躍る。
「よかった……」
強気で頑張っていたけれど、勝負はどうなるかわからない。つい安堵の言葉がこぼれちゃった。
こうして、私は学期末トーナメント二回戦を無事勝利した。

ゴーグルを外すと、キレイだったモミジの景色が白い壁に戻る。
目の前にはシング・バトルを映す大きめの画面が、その下にはうたアニを接続するための台がある。その台にはヘッドホンとゴーグルを置く場所もあって、私は外したヘッドホンを置いた。
乱れた髪を頭を振って軽く整えると、長いプラチナブロンドの髪が視界の端に見える。
この髪と青い目のせいで昔から変に目立ってしまう私。
そうして注目されてしまうせいで、小学生のころは人前で歌えなくなっちゃったんだ。
それでもたくさんの人に私の歌を届けたいって思いはなくならなくて……
そんなときシング・バトルのプレイヤー育成に特化したこの学校、星彩学園のことを知った。
シング・バトルはこの小さな部屋――ハコの中で歌うから、人目を気にしなくていい。それに、推しのアイドルであるS-JINの橘雄翔くんも通っていて、彼に会ってみたいなって気持ちも後押しになった。でも、そうして星彩学園に来て、雄翔くんとも仲良くなれて、シング・バトルをするためのチームメンバーもできて……
みんなと関わっていくうちに、少しだけど人前でも歌えるようになってきたの。

と言っても、まだ注目されるのは苦手だからトレードマークになっているうさ耳つきの大きな帽子は手放せない。私は台の上のカゴに置いておいたうさ耳つき帽子をかぶって眼鏡をかけると、ハコの外へと出た。

ドアを開けた途端、たくさんの人のざわめきが聞こえる。

私と同じ中等部の制服である白のブレザーと、高等部の制服である水色のブレザー姿の生徒たち。

ここはシング・バトルの訓練ルームの一つだ。

ここではいま、星彩学園の一大イベント・一学期末トーナメントが行われている。

他にも試合をしている生徒はたくさんいるから、私に全部の注目が集まるわけじゃない。けれど、私と似取くんの試合を見ていた人たちの視線がいくつか集まるのを感じた。

前までは髪を全部帽子に隠して目立たないようにしていたけれど、一回戦のときに覚悟を決めて帽子と眼鏡を取ってみたの。

それからは髪を隠すのをやめたんだけど……

やっぱりプラチナブロンドの髪は目立つみたいで、なんだか注目されてる気がする。

思わず帽子のはしっこをつかんで深くかぶると、小走りで近寄ってくる足音が聞こえてきた。

「流歌ー！」

大きく片方の手を振りながら私を呼ぶのはチームメンバーの藤子ちゃんだ。彼女とは最初に一度ぶつかったけど、今では頼れる仲間の一人だ。

「藤子、走ったら危ないでしょ!?」

「人多いんだから、ぶつかっちゃうよ？」

藤子ちゃんの後ろからは武家のお姫様っぽい雰囲気の女の子が二人。

うり二つの彼女たちは、双子の姉妹だ。藤子ちゃんを厳しく叱りつけているポニーテールの子が姉の千代ちゃんで、後ろから冷静に諭しているツインテールの子が妹の千絵ちゃん。

「ごめんごめん、でもやっぱり勝ててうれしいんだもん！」

笑いながら二人に謝った藤子ちゃんは、シング・バトルでうたアニが出す技のエフェクトを作ってくれるエンジニアなの。

「まあ、そりゃあうれしいのは私たちだって同じだよ？」

仕方ないなぁ、って苦笑ぎみに笑う千代ちゃんは、私が歌う歌の作詞をしてくれている。

「うれしいけど、それではしゃいでケガしたらダメでしょ！　って話だよ」

しっかり叱りつけた千絵ちゃんは、作曲を担当している。
この三人が私のチームメンバー。大事な大事な仲間なの！
私の前に到着した三人は、「とにかく」と前置きをして声をそろえた。
「「流歌、二回戦勝利おめでとう！」」
三人からお祝いの言葉をもらえて、さらに勝利を実感した。
「ありがとう！　みんなの作ってくれた創作歌のおかげだよ！」
歌ったのは私だけれど、三人が歌を作ってくれなければ、私はトーナメントに出場することすらできない。だからしっかりと感謝を伝えた。
私の言葉に笑顔でうなずく三人。でも、千絵ちゃんが少し表情を曇らせた。
「……でも、やっぱり防御の創作歌は必要だね。それがあれば今回もこんなギリギリの戦いにならなくて済んだと思うし」
「あーそうだね」
「やっぱり守りも大事だよねぇ」
千絵ちゃんの言葉に、千代ちゃんと藤子ちゃんも同意する。
たしかに今の状態だと極端に守りが弱い。

防御に限ってしまうと、私の持ち歌はアレンジ歌しかないから。
私も、防御の歌があった方がいいと思う半面、創作歌の作成は三人の仕事だから今から頼むのはちょっと難しい。
「……でも、次の試合までに作れる？」
おずおずと聞いてみると、三人はあごに手を当てて「うーん」とうなる。その仕草がまったく同じで、まるで三つ子にでもなったみたいに見えた。
なんだかちょっと面白いな、と思って見ていたら、千絵ちゃんが最初に口を開く。
「次の試合……準決勝は、他の学年も二回戦が終わってからになるから、数日空くんだよね？だったらできるかも」

「うん、間に合わなかっただけで、防御の創作歌も作りはじめてたし」
明るい表情で千代ちゃんが同意すると、藤子ちゃんがひまわりみたいな笑顔で言った。
「じゃあ決定だね！　準決勝までに防御の創作歌を完成させよう！」
「「おー！」」
つられるようにみんなで拳を上げると、話が終わるのを待っていたかのように一人の男子生徒が声をかけてきた。
「ハコの前でなにやってるんだ？　邪魔になるから、場所変えた方がいいんじゃないか？」
聞き間違えることのない声に、思わずドキッと心臓が跳ねる。
声の主を見ると、涼しげな顔立ちのイケメンがこっちに歩いてくるところだった。
青みがかったサラサラの黒髪と切れ長な黒い目。クールに見える顔立ちは笑うとかわいく見える。
小中学生に大人気のアイドルユニット、S-JINのメンバーの一人にして私の最推しの人物。
……そして、私の初恋の人だ。
「雄翔くん」
名前を呼ぶと、彼はニコッと笑みを返してくれた。

「流歌、準決勝進出おめでとう」
「あ、ありがとう」
最推しで好きな人からのお祝いの言葉にドキドキする。
雄翔くんはそのまま流れるような仕草で私に右手を差し出してきた。
「ほら、とりあえず移動しよう？」
「そ、そうだね」
まるで本物の王子様みたいにエスコートしようとするその手を取ろうとしたけれど、周りで藤子ちゃんたちがニヤニヤしているのが見えて、サッと手を引いてしまった。
「ほ、ほら！　みんなも行こう！」
恥ずかしさを誤魔化すように、私はみんなに大きく声をかけて先に歩き出す。
後ろからは、「邪魔するなよな」と言う雄翔くんと「ゴメンゴメン」と謝る三人の声が聞こえた。

○憧れの輝くんたち

たくさんの生徒たちの間を縫って、雄翔くんやみんなとハコの前から移動すると、雄翔くん以外のS-JINメンバーとお兄ちゃんの姿が見えた。

声をかけようかと思ったけれど、一緒に長澤さんの姿も見えてちょっと悩む。

少しキツめな雰囲気でクールビューティーな同級生の長澤絢さん。

前に厳しい事を言われてちょっと怖がっていたんだけど、彼女は私が頑張っているのをちゃんと認めてくれた。だから前ほど苦手には思っていないんだけれど……

それでもちゃんと話そうと思うと、まだちょっと緊張してしまう。

なんだか真面目な話をしているみたいだし。

やっぱり今は声をかけないでおこうかな？　って思ったけれど、その中の一人、赤茶の髪を跳ねさせた元気そうな男の子が私に気づいて声をかけてきた。

「あ！　金井さん！　こっちこっち！」

ニカッと明るい笑顔を見せてくれたのは横山陽向くん。雄翔くんと同じS-JINのメンバーで、クラスは別だけれど私と同じ一年生だ。

無視するわけにもいかなくて、お邪魔じゃないのかな？　と思いつつ、私たちは横山くんたちのところへと向かった。

「流歌、ちゃんと見てたぞ！　二回戦勝利おめでとう！」

近くに行くと、真っ先にお兄ちゃん――金井奏月が私の勝利を祝ってくれた。

ちょっと天然なところがあるけど、私を心配してこの学園へ一緒に入学してくれた優しいお兄ちゃんなんだ。

そんなお兄ちゃんの横にいたかわいいタイプの先輩が笑顔を向けてくれる。

「俺は絢の方を観戦してたから観られなかったけど。流歌ちゃんも準決勝進出できたんだな、おめでとう」

長澤さんと幼馴染みだという高等部一年の彼は、S-JINの最年長リーダーでもある中島大地先輩だ。

その中島先輩のあとに、とても落ち着いた雰囲気の先輩が続く。

「おめでとう、流歌さん。僕は観させてもらっていたよ。少し危なっかしいバトルだったけれ

ど、しっかり歌に感情を乗せていたね。二回戦勝利おめでとう」
注意点を指摘しつつお祝いを口にしてくれたのは、同じくS-JINの藤原翼先輩だ。私の二つ上で、とてもキレイな顔立ちをしているミステリアスな雰囲気の人。歌もS-JINの中では一番上手いんだ。
「あ、ありがとうございます！」
お兄ちゃんや、カッコイイ先輩たちのお祝いにお礼を言うと、横山くんが藤原先輩との間に入るようにして近づいてきた。
「俺も見てたぜ！　二回戦勝利おめでとう！　バトル中の金井さんはすっごく真剣で……かわいいだけじゃなくてカッコイイよな」
トレードマークの赤い石のついたイヤーカフが、左耳でキラッと光っている。
横山くんにも「ありがとう」ってお礼を伝えると、少し後ろの方にいた雄翔くんが近づいてきた。
横山くんを押しのけるようにして入ってくると、雄翔くんは不機嫌そうな表情で文句を言う。
「陽向、近すぎ」
「は？　なんだよ、邪魔すんなよ」

「するに決まってるだろ？」
そのままにらみ合う二人を見て、私は止めるべきなのか迷う。
雄翔くんと横山くんってこんなふうに言い合う仲だったかな？　たしかに同じ学年だからデモバトルとかで対戦する機会は多いけれど……
どうしよう。
助けを求めて周りを見るけれど、お兄ちゃんたちは藤子ちゃんたちとそれぞれ話をはじめていた。
結果、目が合ったのは長澤さんだ。
「あなたも準決勝進出できたのね。おめでとう、次の試合は見られると思うわ。楽しみね」
涼しげな顔に笑みを浮かべて祝ってもらえて、緊張がやわらぐ。
「あ、ありがとう。長澤さんも準決勝進出おめでとう！」
私もお祝いの言葉を返すと、長澤さんはほんの少しだけ目元をゆるめて「ありがとう」とお礼を口にした。
なんだか、雄翔くんに向けるのとはちがう感じにドキドキする。
彼女に認められたことがうれしい。前にキツいことも言われたけれど、やっぱり長澤さんは

私の憧れでもあるってことなんだろうな。
長澤さんからの言葉をかみしめていると、千絵ちゃんと話していた中島先輩がこっちを見た。
「とにかく二人とも準決勝に進めて良かったな！　明日からはじまる俺たちの試合も応援してくれよ？」
「そうだね。流歌さんたちが応援してくれるなら、なおさら頑張らないと」
藤原先輩もゆるりと笑みを浮かべる。
すると中島先輩は、私たちというより長澤さんだけに視線を向けた。
「絢、応援してくれるだろ？」
ちょっと真剣さを感じるかわいい笑顔。
そんな中島先輩の眼差しを受けた長澤さんは、サッと視線をそらした。
「ま、まあね」
そっけない言い方だったけれど、長澤さんの耳がちょっと赤い。
その赤さを誤魔化すためかな？　長澤さんは話をそらすように別の話題を出した。
「そういえば、私は今日から撮影が入ってるけど、あなたたちは？　たしかバラエティ番組の収録があるんでしょう？」

「ああ、俺と雄翔が数日後に仕事入ってるな」
そのままS-JINのみんなと長澤さんは仕事の話をはじめる。
言い合いをしていた雄翔くんと横山くんも、真面目に仕事の話をはじめた。
「陽向と翼先輩も別のバラエティ番組出るんだよな？　あれ、いつだっけ？」
「俺たちの収録はまだ先だな。夏休み入ってからじゃなかったっけ？」
さっきまでの少しトゲトゲしい雰囲気とは打って変わって、同じアイドルユニットの仲間って感じの雄翔くんと陽向くん。二人の変わりようを不思議に思うけれど、それ以上にドキドキした。
すごい、芸能人だ……
わかっていたけれど、こうして目の前で収録とかテレビ番組の仕事のお話をされると実感せずにはいられない。
私、本当にすごい人たちと知り合いになってるんだ。
「改めて考えると、あたしたちすごい人たちと仲良くしてるんだね……」
私と同じことを考えていたのか、藤子ちゃんがポツリとつぶやく。
その言葉に私は心の中でうんうんと大きくうなずいた。

みんな、芸能人とシング・バトルのプロを目指す学生を、どっちも頑張ってるんだ。
本当に、すごい。
目の前の彼らが、とても輝いて見えた。

○決勝会場はすごい場所

中等部一年と二年のトーナメント前半が終了した次の日。
一日の授業がはじまる前に、担任の植木先生から今後のスケジュール確認があった。
「今日から中等部三年、高等部一年の一回戦がはじまる。三日かけて二回戦まで完了し、一日休息日をはさんで五日後の土曜日に別会場で準決勝以上の試合が行われる予定だ」
一通りの流れは、学期末トーナメントがはじまる前に聞いていたからみんなわかってると思う。
でも、植木先生は念を押すように付け加えた。
「準決勝以上に進む生徒にとってこの五日間は大事な時期でもある。他の生徒は邪魔などしないように！」
強めの口調でしっかりと釘を刺され、クラスのみんなは「はーい」と返事をしていた。

♪♪♪

そんな、植木先生に念押しされた日のお昼。
私たちは食堂の同じテーブルに見慣れたメンバーで座っていた。
千代ちゃん、千絵ちゃん、藤子ちゃん、お兄ちゃん、S-JINの中島先輩と藤原先輩。
そして数日前から一緒にお昼を食べるようになった雄翔くんと横山くんだ。
はじめはお兄ちゃんと同じチームの中島先輩と、その中島先輩に連れてこられた藤原先輩だけだったのに……。どうしてS-JINのメンバーがそろっちゃったのかな？
雄翔くんは悪夢を見て眠れないからって、とある場所でお昼も仮眠を取っていたんだ。でも今は夜もちゃんと眠れるようになったから、一緒に食べるようになった。
でも、横山くんは前までチームメンバーと一緒に食べていたはずなんだけど……こっちに来て大丈夫なのかな？

「そういえば、準決勝からは会場が別だって聞きましたけど……どこにあるんですか？」
アイドルを目の前にしているけれど、この状況にもう慣れてしまったのか千絵ちゃんが先輩たちに質問していた。
その隣できつねうどんのお揚げを食べていた千代ちゃんが続く。
「学園にあるって話は聞いたんですけど、それっぽい建物は見当たらないですよね？」
千代ちゃんの言うとおりだ。
この学園は普通の授業を受けるための教室以外にも、カラオケルームやシング・バトルの訓練ルーム、他にも普通の学校にはないようなハイスペックなコンピュータールームや、多くの蔵書を持つ図書室がある。
そんな広い場所だから、他の施設を見つけられないってこともある。
でも、さすがに大人数が入れるような場所を見つけることができないってことはないんじゃないかな？
私も気になって聞いていると、中島先輩が説明してくれた。
「まあ、学園から見ても見つからないだろうな。校舎からはちょっと距離があるから」
なんでも、決勝会場はふだん一般に貸し出しもしているようなホールなんだって。学園関係

者以外の人も多く出入りするから、安全上の問題で離れた場所にあるんだとか。
「たしか準決勝や決勝のときは、学校からシャトルバスが出ていたね」
藤原先輩が付け加えると、お兄ちゃんが感心したような声を上げた。
「へぇー。なんか思っていた以上にすごい場所なんだな？」
すると中島先輩がニヤリと笑う。
「すごいのは会場だけじゃないぜ？　人気のゲーム実況動画配信者とかに来てもらって、プロのシング・バトルみたいに盛り上げてもらうんだ！」
ドヤ顔の中島先輩。反対に落ち着いた様子の藤原先輩が付け加える。
「キョウが来ることが多いですよね？　たしか今回もだって聞きましたよ」
「あ、やっぱりか。まあ、キョウは実況上手いからな。一番盛り上げてくれるし」
うんうん、とうなずきながら中島先輩はたぬきうどんを口に運んだ。
なんだか、五日後の準決勝は思っていたよりもすごそう。
緊張すると同時に本格的なシング・バトルができると知って、少しだけワクワクしていた。
そんな会話をしながらみんなの食事も終わったころ。

ちょっとほほを赤くした横山くんが私に声をかけてきた。
「金井さん。あ、あのさ！　よかったら連絡先交換してくれないか？」
「ふぇい？」
とつぜんの申し出だったから、ビックリして変な声が出ちゃった。
「俺、もっと金井さんと仲良くなりたいんだ！　だから……ダメか？」
ちょっと自信なさげに頼みこんでくる横山くん。
いつも元気な横山くんの珍しい姿に少し驚いたけれど、ダメなんてことはない。
最推しは雄翔くんだけれど、S-JINは大好きなアイドルユニットだし、連絡先を交換できるのはうれしい。
ただ、ちょっと前まではただの同級生って感じだったから、いきなり仲良くなりたいって言われてとまどっちゃった。
そんな私の気持ちを察してか、雄翔くんが間に入ってくれる。
「陽向、ちょっといきなりすぎじゃないか？」
「そ、それはちょっと思うけどさ。でも、仲良くなりてぇんだよ。大体雄翔だけ連絡先知ってるのもずるいだろ!?」

押しとどめる雄翔くんに横山くんは一瞬ひるんだけれど、むっとしたように言い返した。
そこに藤原先輩も入っていき、「たしかにずるいよね」と横山くんに味方する。
「僕も流歌さんともっと仲良くなりたいな。何度もこうして一緒にお昼ご飯を食べているし、連絡先交換くらいしてもいいと思うんだけど」
なんだか言い合いになってきた。どうすればいいんだろう？
とまどいはしたけれど、別に交換するのがいやってわけじゃないし。
眉をハの字にしていると、見かねたように中島先輩が声を上げてくれた。
「それならみんなで交換しようぜ」
「それもそうだよな。俺も藤子ちゃんの連絡先知っていれば、相談とか受けやすいし」
お兄ちゃんも同意したおかげで、そのままみんなで連絡先の交換会みたいになった。
中島先輩はかわいい顔をしていてふだんはふざけていることもあるけれど、さすがは最年長リーダーってことかな？
こんなときはいい感じにまとめてくれて、頼りになる。
お兄ちゃんも天然さはあるけれど、フォローしてくれるし。
やっぱり高校生はちがうのかな？

「みんなで交換なら……まあいいけど」
それぞれの連絡先を交換しながら、雄翔くんは少し不満そうにつぶやく。
言葉の通りみんなで交換がいやなわけじゃなさそうだけど……
なにを不満に思っているのかわからなくて、私はむすっとした雄翔くんを見ながら首をかしげる。
すると同じく雄翔くんを見ていた中島先輩が苦笑しながら、口を開いた。
「――そういえば、雄翔たちは試合に出ない代わりにデモバトルするんだろ？」
どうやら雄翔くんの気分を変えるために話題を変えようとしてくれたみたい。
やっぱり頼りになるなぁと思っていると、雄翔くんより先に横山くんが声を上げた。
「そうなんっすよ！　一年でメタモルフォーゼできるのは俺たちだけで有利だから、今回だけはトーナメントから外れてくれって」
ひどいっすよね、と文句を言う横山くんだけれど、逆に雄翔くんは冷静に話す。
「でも実際有利だからな。長澤がメタモルフォーゼできるようになったけれど、他はまだまだだし」
「んなこと言ったって、『ノーヴァ』獲得のチャンス一つ減ったんだぜ？　ちょっとくらいは

不満に思うだろ？」
『ノーヴァ』っていうのは、在学中に行われるトーナメントで優勝した学生に贈られる星のピンバッジのこと。高等部卒業までに七つ集められれば、世界大会の参加権を得られるんだ。
そのためのチャンスが減ったなら、たしかに文句も言いたくなるよね。
横山くんの言葉に内心うなずいていたら、雄翔くんがあきれたようにため息をついた。
「その代わりに、準決勝前のデモバトルっていう目立てる場を用意してもらえたんだろ？『ノーヴァ』獲得のチャンスは減ったかもしれないけど、スポンサーがついてくれるチャンスは増えるんだ。陽向だってそれは納得してたじゃないか」
「それは、そうだけど……」
プロのeスポーツプレイヤーになるには、スポンサーが必要だ。練習するための環境を整えてもらったり、道具を支給してもらったり。もちろん自分で用意できるなら問題はないかもしれないけれど、結局収入は必要。その収入であるお給料とかも、スポンサー企業から出してもらえるんだ。
『ノーヴァ』獲得のチャンスは減っても、新バージョンのシング・バトルのお披露目でもあるデモバトルができる。それなら、スポンサー獲得という意味ではこれ以上ないポジションだと

思う。
「でもさ、スポンサー獲得に有利って言っても目に見える形でいいことあるわけじゃないし……やる気がでねぇんだよ」
ため息をついてうなだれた横山くんは、そこでとつぜん「そうだ！」と声を上げて私を見た。
「金井さん、俺のこと応援してくれよ！」
「へ!?」
とつぜん話を振られて、キラキラとした彼の笑顔を真正面から見てしまう。
元気で明るいタイプの横山くんにピッタリの笑顔を向けられて、そのまぶしさに一瞬なにを言われたのかわからなかった。
「お、おうえん？」
「ああ、金井さんが応援してくれてるって思うだけでやる気出るからさ」
そんなふうに言ってもらえるのはうれしいけれど、私だけじゃなくてみんなから応援してもらった方がやる気を出せるんじゃないかな？
それに対戦相手は雄翔くんだ。
好きな人の応援をしないなんて無理な話だし、横山くんだけを応援するなんてことは……た

ぶん、できない。
「おい陽向、無茶言うなよ。お前の対戦相手は俺だぞ？　優しい流歌がどっちかだけを応援なんてできるわけないだろ？」
なんて答えようか迷っていると、雄翔くんが間に入ってくれた。
私のことを理解してくれている言葉になんだか胸があったかくなる。うれしくて、でもちょっとむずがゆいような気分。
雄翔くんの言葉どおり、どっちかだけを応援なんてできない。だから、迷いつつも私はぎゅっと手を握り締めた。
「えっと……横山くんも雄翔くんも、二人とも応援するよ！」
応援の意気込みが伝わるように両手で握り拳をつくってみせる。
二人はそんな私をじっと見た後、お互いにらみ合った。
「俺、負けるつもりないからな？」
「俺だって負けるつもりはねえよ」
そのまま火花を散らし合う二人を見て、私の一回戦が終わった後くらいからこの光景よく見るなぁ……と不思議に思う。

でも不思議そうにしているのは私だけで、周りのみんなはなんていうか生あたたかい目をして二人を見ている。この反応も一回戦が終わったあたりからだ。
わかっていないのは私だけっていう状態でちょっと不満。でも、聞いても誰も教えてくれないし……
下ろしている髪をくるくると指に絡めながらちょっといじけていると、あきれたような中島先輩の声が聞こえた。
「こりゃダメだ、二人とも自分の気持ち全然隠せてない。社長から言ってもらった方がいいかな……？」
ため息交じりのその言葉の意味は、やっぱり私にはわからなかった。

○防御の創作歌、作成中！

放課後、私は教室で仲間のみんなと額をつき合わせていた。
防御の創作歌作成のための話し合いをしよう！　ということで、千絵ちゃんの机を囲む形に

なっている。
「とりあえず、ある程度はできているのよね」
「うん、どんな創作歌にするかは決めて、それぞれ作ってはいたからね」
千代ちゃん、千絵ちゃんがあごに手を当てて同じ仕草で話している。そうすると本当に髪型以外はそっくりで、なんだかかわいい。
そんな二人に、藤子ちゃんが質問する。
「二人の進み具合はどんな感じ？　あたし、あとは細かい調整部分だけなんだけど」
「んー私も同じくらいかな？　ほぼできていて、あとは流歌が歌いやすいように曲と合わせながら言い回しの調整とかする感じ」
作詞担当の千代ちゃんが首をひねりながら答えると、作曲担当の千絵ちゃんも同じく首をひねって答えた。
「同じく、かな？　千代の歌詞と合わせながら微調整する感じ」
「そっか、じゃあ本当にみんな最後の仕上げだけって感じなんだね？」
私がまとめて確認すると、三人はそろってうなずいてくれる。
そのまま代表するように千絵ちゃんが言った。

「じゃあ、それぞれの仕事を明後日までに完成させて、三日後にできた曲と歌詞とエフェクトを合わせよう」
「うん、そうだね。そのスケジュールなら確実に間に合いそう」
千代ちゃんが笑顔でうなずくと、藤子ちゃんが「よし！」って意気込んだ。
「じゃあ、それぞれ防御の創作歌作成のために頑張ろう！」
そのまま握り拳を上げる藤子ちゃんにつられて、私も他の二人も一緒に拳を上げる。
そして声をそろえた。
「「「おー！」」」
今後の方針を話し合った私たちは、それぞれの仕事をするために教室で解散した。
私もみんなの作ってくれた創作歌をしっかり歌えるように、歌の練習をしようと一人でカラオケルームへ行くことにした。
何人も入れる部屋は予約が必要なときもあるけれど、一人用の部屋は多いし空いているだろう。
それに今日から三年生と高等部一年生のトーナメントがはじまる。トーナメント中の学年は

試合を観ている人がほとんどだし、なおさら空いてるはずだ。
私はカバンに荷物をまとめると、よしっと意気込んで立ち上がる。
するとちょうど隣の席の雄翔くんも「よし、終わった」と言って立ち上がった。
「へ？」
あまりにもタイミングが同じだったから、驚いて目をパチパチさせちゃった。
雄翔くんも同じだったのか、驚いた顔で私を見ている。でもすぐにやわらかい笑顔になって声をかけてくれた。
「流歌も教室出るところなのか？　俺もいま日誌書き終わって職員室に向かうところなんだ」
「あ、そっか。今日の日直、雄翔くんだったもんね」
ちょうど席を立つタイミングが一緒になった私たちは、そのまま一緒に教室を出る。
日誌を先生に渡すために職員室へ向かう雄翔くんとは途中で別れちゃうけど、分かれ道までは一緒に歩いた。
「俺はこのままデモバトルのことで話があるからって職員室に呼ばれてるんだ。流歌は今日どうするんだ？　防御の創作歌を作るって言ってたけど」
「うん、みんなあとは仕上げだけって言っていたから。まずはそれぞれの分野の完成を頑張っ

てくれてるの。だから私もカラオケルームで歌の練習をしようかな？　って思って」
話しながら、ちょっとドキドキしている自分に気づく。
途中までの道のりだけれど雄翔くんと一緒になれてうれしい。
今も、毎朝秘密の東屋で二人きりで会っているけれど、学校で二人きりってなるとまた別のうれしさがあったから。
それに……
「そっか……頑張れよ？　流歌は俺のこと応援してくれるって言ってたけど、俺も流歌のこと応援してるから」
なんて、私だけが知っているんじゃないかって思えるほどの優しくやわらかい笑顔に、泣きたいくらいうれしくなった。
「うん……ありがとう」
ドキドキと胸の鼓動が速まって、感動で涙がにじみそうになる。
でも、本当に涙がにじんでくる前に大きな声が私にかけられた。
「あ！　金井さん！」
「は、はい！」

思わず返事をして振り返ると、うれしそうな笑顔の横山くんが近づいてきていた。
ワンちゃんだったら尻尾をブンブン振っていそうなほどの明るい笑顔。その笑顔が、雄翔くんの姿を見たとたん、不満そうなものに変わる。
「……と、雄翔も一緒かよ」
「一緒かよ……って、ちょうどよかったじゃないか。陽向もデモバトルの件で職員室に呼ばれてるんだろ？」
「そうだけどさ、金井さんともっと話したいんだよ」
「ふーん……？」
横山くんの言葉に、雄翔くんの声のトーンが一段下がった気がした。
……なんだか、空気も冷たくなったような。
そんな雄翔くんの様子に気づかないのか、横山くんはパッと笑顔に戻って私を見た。
「とにかくそういうことだからさ、俺金井さんともっと話したいんだ！　連絡先は交換したけど、長電話とかするわけにはいかないし、メッセージだとたくさん話すの大変だし」
「たしかに、そうだね」
昨日連絡先を交換したけれど、電話はしなかったしメッセージもちょっとしたあいさつだけ

だった。
……もしかしたら気を遣ってくれてたのかな？
横山くんって藤子ちゃんぐらい猪突猛進っぽくも見えるけれど、結構人のこと考えてくれるんだよね。テレビとか見ていてもそういう部分はあったし。
そんな横山くんだから、S-JIN の中でも雄翔くんと二分するくらいの人気があるんだろうな。
なんてことを考えていたら、少し落ち着いた様子の横山くんが私をジッと見つめていることに気づいた。
「俺にとって金井さんはトクベツな女の子なんだ」
「え？」
まぶしそうな、優しい眼差しはキラキラと光っているかのよう。
「だって、俺……金井さんのこと――ぐえっ！」
まっすぐ私を見下ろしていた横山くんの顔が、とつぜん苦しそうなものに変わる。
いつの間にか横山くんの後ろにまわっていた雄翔くんが、横山くんの後ろえりをつかんで引っぱったのだ。
「なにを言おうとしてるんだ、陽向？　お前が言い出した勝負でいえば、俺が先に言うべきこ

とだよな？　それ」
笑顔だけど、なんだか黒い雰囲気の雄翔くんはちょっと怖くも感じる。
「ちょっ、雄翔！　苦しいって――ぐぇ」
「なんにせよ、お前も呼ばれてるのはたしかだろ？　あんまり遅くなると先生に叱られるぞ？」
雄翔くんは私から横山くんを離すように引っぱると、そのまま引きずるように離れていく。
横山くんは苦しそうにしているけれど、しゃべれているみたいだから大丈夫……なのかな？
えりを引っぱられて苦しそうな横山くんを心配していると、雄翔くんがいつもの笑顔に戻って私を呼ぶ。
「流歌、練習頑張れよ！」
「う、うん！」
雄翔くんのその笑顔にはまっすぐな芯のようなものも感じて、自然と背筋が伸びた。
私は去っていく二人を見送りながら意気込む。
大好きな雄翔くんに応援してもらえたんだもん。練習頑張ろう！

○週去り財産

やっぱり一人用のカラオケルームは空きがあって、無事に部屋を借りることができた。
発声練習は当然するとして、練習する歌はなににしようかな？
カラオケルームの廊下を歩いていた私は、立ち止まってスマホを取り出す。
電源を入れて『うたアニ』のアプリを立ち上げると、画面にはすぐにラブちゃんが表示された。おやつの時間帯だったのか、美味しそうにドーナツをほおばっている。
ラブちゃんのかわいさにほほをゆるませつつ、話すためにマイクのボタンをタップした。すると私に気づいたような仕草をしたラブちゃんは、そのままコテンと首をかしげる。
【なあに？】
吹き出しと一緒に文字が表示される。
「歌の練習をしたいの。なにがいいと思う？」
【シング・バトルの練習？】

「うん」
【だったら……これがいいと思う！】
ラブちゃんの言葉の後に、いくつか曲名が表示された。
【どれから歌う？】
目をキラキラさせてピョンピョン跳びはねているラブちゃんは、うれしそうな様子を全身であらわしている。
ホント、かわいいなぁ。
ラブちゃんの様子にほっこりしながら、ふと思う。
そういえば、一人で……ううん、ラブちゃんだけに歌を聴いてもらうのは久しぶりかもしれない。
最近は雄翔くんや千代ちゃんたちに聴いてもらって、人前で歌う練習ばかりしていたから。
「……六年生のころは、ずっとラブちゃんだけに聴いてもらってたからなぁ」
人に注目されるのが苦手になって、友達の前でも歌えなくなった苦しい時期。
あのころは家族の前でしか歌えなくなってて……でも家族だっていつも聴いてくれる時間があるわけじゃないから。だからずっとラブちゃんばかりに聴いてもらってたんだ。

去年のことを思い出して少し気分が落ち込んでしまった。
そんな私を元気づけようとしたわけじゃないだろうけれど、ラブちゃんがウズウズしながら表示している言葉を変える。
【ルカ、歌を聴かせて！】
「……うん、そうだね。聴いてね、ラブちゃん」
【わぁい！】
昔のことを気にしても仕方ない。とにかくいまやるべきことを一生懸命やらなきゃね！
落ち込んだ気持ちを振り払うように、私はうさ耳帽子ごとプラチナブロンドの髪を振って意識を切り替える。
すると、とつぜん大きな声が廊下に響いた。
「あー！　お前、金井！」
少し怒っているようにも聞こえる声の方を見ると、私の二回戦の対戦相手だった似取くんがいた。
明らかに不機嫌な顔で近づいてきた彼は、私にビシッと人差し指をつきつけて叫ぶ。
「お前、ズルしただろ!?」

「はい!?」
「二回戦のシング・バトルだよ！」
似取くんの勢いにビクッとしちゃったけれど、ようは二回戦のバトルが不満だったってことみたい。
でも、ズルなんてしていないのに……言いがかりだよぉ！
「俺のチームには兄さんに紹介してもらった上級生のエンジニアもいるんだぞ!?　俺が負けるわけない！」
似取くんのチームメンバーには上級生もいるんだ？
上級生から紹介してもらって、他学年の生徒とチームを組んでもいいらしい。でも、一年生は上級生とのツテなんてほぼないから、上級生と組んでいる人がいることに少し驚いた。
その間にも似取くんは目を三角にして、私を怒鳴りつける。
「俺が勝つに決まってんだ！　お前みたいな弱っちぃやつに負けるわけない！」
「そんなこと言われても……」
私はもちろんズルなんてしてない。というか……
「だいたい、シング・バトルでズルってどうやるの？」

歌に乗った感情を読み取って成長するうたアニが攻撃や防御をするのがシング・バトルだ。
歌に感情を乗せるだけなのに、どうやってズルするの？
単純に疑問だったんだけど、似取くんはさらに怒り顔になった。
「うるさい！　とにかくなんかズルしたんだろ！」
「そんな……」
本当に言いがかりでしかないけれど、怒っている似取くんが怖くて強く言い返すことができない。
これじゃあなにを言っても火に油を注ぐだけな気がする。
どうしようもできなくて縮こまっていると、聞き覚えのある声がかけられた。
「なにやってるんだい？」
「あ、藤原先輩……」
見知った人が来てくれてホッとする。でも似取くんは藤原先輩にも強気でうったえた。
「藤原先輩……俺はコイツがシング・バトルでズルしたから問い詰めてるんですよ！」
「ズルって、具体的には？」
藤原先輩は、どちらの味方をするわけでもなく、淡々と質問を返す。

立ち読みサンプル
はここまで

問われた似取くんは、一瞬言葉に詰まってから口を開いた。
「そ、そんなのわかんないっすよ。でもコイツがズルしたに決まってる！　じゃなきゃ俺がこんなやつに負けるはずがねぇ！」
「……」
あまりにも一方的な言い分に絶句する。
はっきりとした理由も証拠もないのに、ズルしたって言い張るなんて……
同じシング・バトルのプロプレイヤーを目指して頑張っている人なのに、こんなふうに濡れ衣を着せられて……悲しかった。
落ち込む私の前に、藤原先輩が背中を向けて立つ。
「じゃあ、彼女がズルをしたっていう証拠があるわけじゃないんだね？」
似取くんと向かい合って、藤原先輩は少し強い口調で聞き直す。逆に似取くんはぎくりと肩を揺らした。
「え？　そ、そうですね」
「じゃあ、キミが負けたのはやっぱり実力ってことじゃないかな？」
「で、でも――！」

「僕も、キミたちの試合を観ていたよ」
なおも自分の主張を通そうとする似取くんだったけれど、藤原先輩は彼の言葉をさえぎって話し出す。
「流歌さんはうたアニの読み取り力が優れているんだよ。すべてのスキルを合わせたとき、キミより流歌さんが優れていたってことだ。ズルなんてしていない」
「うたアニの……読み取り力？」
「そうだよ、うたアニは歌に込められた感情を読み取って成長するAIアニマルだ。歌を何度も聴かせることで、歌に込めた感情を読み取ってもらいやすくなる」
「え？　そ、そうだったのか……？」
……そう、だったんだ。
藤原先輩の説明に驚いて、似取くんだけでなく私も顔を上げる。
歌に込められた感情を読み取って成長するのはわかっていたけれど、うたアニに歌を何度も聴かせると読み取り力が増すのは知らなかった。そんな私の様子を知ってか知らずか、藤原先輩はほんのり声をやわらかくする。
「……流歌さんは今までたくさんうたアニに歌を聴かせてきたんだろうね。そうして頑張った